

2022年(令和4年)

赤目まちづくり委員会・市民センター



7月号

赤目まちづくり通信

発行／赤目まちづくり委員会（赤目市民センター）〒518-0465名張市赤目町丈六238-1

E-mail: akame-ko@emachi-nabari.jp

TEL&FAX: 63-0329

坂上・森岡副会長あいさつ・抱負

赤目まちづくり委員会 副会長 坂上正佳
梅雨明けの蒸し暑い日が続いておりますが、皆様方にはお元気に仕事また農作業に励んでおられる事と思います。さて、昨年に引き続き本年度も副会長をさせて頂く事となり、昨年に増して緊張感を持っています。「明るい赤目、安心安全な赤目」にと、努力して参ります。2年間諸行事の縮小・中止が相次ぎましたが、今年度は国の方針でもある with コロナ・ポストコロナに沿って安全を確保し実施したいと思っています。

更に、諸行事の計画・実施に当たっては、事務局（市民センター）依存的な運営を各部会で部長を中心に計画・実施・遂行して頂くようお願いします。また本年度より赤目竹あかり SDGs プロジェクトが本格始動するため、事務局の仕事が増えオーバーワークとなる恐れがある事と、各部会の部長・委員の皆様で考えて頂き、みんなが喜んで頂けるような行事を推進して行けたらとの思いです。なお、各部会の行事の起案から実行まで、事務局及び担当役員がアドバイス等をして、センター長・会長に報告する形で運営します。以上の様に、改革を交え推進して参りますので、何卒一層のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

赤目まちづくり委員会 副会長 森岡眞理

この度副会長をお引き受けしました、星川の森岡眞理と申します。よろしくお願いいたします。自己紹介から、名前は「しんり」と読みます。昭和26年生まれの爺さんです。三重県職員として35年間勤務していました。リタイア後、私のライフワークである釣り（フライフィッシング）を通して、魚の保護や環境問題に仲間と共に関わっています。いつか赤目キャンプ場で、子供たちに釣りの魅力をお伝え出来ればと考えています。

さて、副会長をお引き受けし、区長もやりながら出来るだろうかと不安に思っていました。そんな中、今私の住んでいる星川地区は子育て世代の若者がわずかながら増えてきており、この春から月1回集会所での熟年世代と子育て世代が交流する場としてサロンを始めたところ、幸い回を重ねるたびに参加者も増え、子供たちの声もにぎやかになり、手応えを感じています。すべての世代が、「赤目に住んでいて良かった」と思えるまちづくりを目指して、微力ながら頑張りたいと思います。

6月度「憩いのサロンほしかわ」を開催

6/19(日) 9時半より星川集会所で、子供たちを中心としたゲーム大会を実施。毎月第三日曜日9時半開催予定。



ホタル観賞会実施

6/19(日) 19時半より、梅雨の合間で天候に恵まれ、気温もよく・風も無く絶好の蛍狩り日和。吉岡正夫（ホタルの守り人・名張の蛍保全活動20年）さんの案内で、風呂屋橋上流の堰で100匹余りの蛍が、水面に映って綺麗でした。カメラ・携帯を片手に30名余りの参加者で、優雅な感動のひと時を楽しみました。



名張クリーン作戦開催

6月5日(日) 名張市のクリーン作戦に合わせて、赤目町内のクリーン作戦を開催。朝9時に市民センターに集合し、藤村会長挨拶・坂上副会長からの説明・環境部宮本部長からの実施要項の後、5か所の清掃場所に分かれゴミ回収・草刈・剪定作業を実施。各区より多くのご参加を頂き10時半には、市のゴミ回収車に搬入、無事完了いたしました。御参加頂きました皆さま、本当にご苦労さまでした・ありがとうございます。



ふれあいサロン・忍たまを開催

6月8日・22日(水) 珈琲サロン「赤目ふれあいサロン」を開催。18日は、サンサンカレーも開催され50名参加。22日は、子育て広場「赤目忍たま広場」開催。平穏な日常を取り戻すべく、検温・マスク着用・消毒・換気・名簿作成の上、実施。adsの取材もあり、皆さんの笑顔が、夕方のニュースで放映されました。忍たまでは、「七夕まつり」笹飾りと思いを入れた短冊を製作。



ちまきづくり開催・柏原ふれ愛サロンひまわり

6/10(金)に刈り揃えられたカヤで、11日(土)9時半より柏原集会所でチマキづくりを開催。幼児・小学生も餅つきに参加し、小さな手で餅を丸め、カヤで包んでいました。北川市長を始め多くの来賓の方にも参加を頂き、始めて粽づくりに参加する人など、楽しい地域の伝統行事を2年ぶりに開催しました。



カラーコピー、スキャンニング等サービスも行っています。詳細は、市民センターまで、お気軽にお尋ねください。

名張市指定ゴミ袋取扱、紙おむつ専用ごみ袋（無料交付）
特大 45リットル 10枚 480円・大 30リットル 10枚 300円・中 20リットル 10枚 180円・小 10リットル 10枚 80円
紙おむつ専用ごみ袋は、対象者一人当たり30枚以内。

赤目まちづくり委員会
赤目市民センター

ホームページ



赤目まちづくり委員会・市民センターの情報がホームページでご覧いただけます。
※スマホ・携帯電話で左のQRコードを読み取って下さい。

子供も大人も、参加自由

2022年
赤目夏まつり

8月6日(土)
午後5時～9時
錦生赤目小学校
運動場にて開催

<演目>
赤目中学校吹奏楽部
盆踊り・出店
お楽しみ抽選会

主催 赤目夏まつり実行委員会

7月4日～7月31日までの予定

月	火	水	木	金	土	日
7/4	5	6	7	8	9	10 参議院選挙・竹 風鈴づくり
11	12	13 ふれあいサロン	14	15	16 市民大学講座 「天正伊賀の乱」	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26 忍たま広場	27 ふれあいサロン 忍たま広場	28	29	30	31 小学生Dayキャン プ

<注意> 7/10(日) 風鈴づくりの会場が、錦生赤目小学校・体育館9時半に変更。

8月の行事予定

- ★8/6(土) 赤目夏まつり（錦生赤目小学校運動場）
- ★8/10(水) ふれあいサロン
- ★8/11(木・祝)・8/20(土) 夏休子ども映画会
- ★8/13(土)～15(月) 市民センターお盆休み・休館
- ★8/14(日) 星空観察会
- ★8/17(水) ELP健康教室
- ★8/18(木) サンサンカレー
- ★8/24(水) ふれあいサロン・忍たま広場

※赤目市民センターでは、コロナ対策として、検温・マスク着用・消毒・換気、名簿の作成など、3密（密集・密接・密閉）を避けて運営しています。しかしながら状況に応じ、中止・延期になる場合が有りますので、ご注意ください。

赤目市民センターまつりの開催について

詳細は、未定ですが昨年に続き本年も「展示」会場を設け開催を予定しています。つきましては多くの皆様の出品・展示をお願い致します。
実施予定日 10月29日(土)～10月31日(月)(3日間)

小学生「お茶会体験」募集中!! 申込・市民センターまで
8/22(月) 13時半より 小学生対象 定員10名まで(先着順)

Vol.30 新・歴史散策紀行…「伊賀・赤目文化遺産」(各区・地域の名所・名品を募集しています。)

「伊賀の忍者 Part.2」

前号に引き続き「伊賀の忍者」の話しを。伊賀忍者を一躍有名にしたのは、「神君伊賀越え」である。天正10年(1582年)6月2日、明智光秀が京都本能寺に宿泊していた織田信長を襲撃し、信長が自害して「本能寺の変」が起きる。堺にいた徳川家康は急いで本拠地・愛知県岡崎に帰ろうとした。その際、東海道を通ったのでは見つかるので、あえて歩行困難な甲賀・伊賀の山中を通るルートを選んだ。これがいわゆる「神君伊賀越え」である。家康は京都からやって来た茶屋四郎次郎に、河内国飯盛山付近で信長が没したことを知り、山城国宇治田原、近江国甲賀小川、御斎峠(おとぎとうげ)、伊賀国柘植、加太峠、そして伊勢国白子(現・鈴鹿市白子)で乗船し、三河国大浜(現・愛知県碧南市)に上陸して岡崎城へ帰還した。(ルートには諸説有)

家康の随行者は34名余りで、道中で甲賀衆・伊賀衆に守られて命からがら無事帰り着いた。しかし武田氏の旧臣・穴山梅雪は、一行より少し遅れたため土民(農民)に殺害される。伊勢路まで供をした者を直参に取り立て、途中鹿伏兎(かぶと・加太)峠越えで引き返した者200人は、尾張鳴海で召し抱え同心に取り立てた。そして服部半蔵に江戸城警備をあたせた。甲賀者も直参・与力・同心として江戸城下に住まわせた。江戸城(現・皇居)半蔵門は、門外に半蔵の屋敷があり命名。服部家の部下が組屋敷を構え、四谷へと通じる甲州街道(現在の国道20号、通称麴町大通り・新宿通り)沿い一帯が旗本屋敷で固められた。



徳川家康像



服部半蔵



半蔵門(皇居)



タートルズ



燃えよ NINJA



カワサキ Ninja400

伊賀と甲賀は2017年4月、「忍びの里 伊賀・甲賀」として日本遺産に認定。海外では「NINJA(忍者)」と表記され、米国の「燃えよ NINJA」は、ショー・コスギ主演のアメリカ映画。ミュータント・ニンジャ・タートルズは、テレビアニメから劇場版実写映画まで大ヒット。アメリカにおけるニンジャブームの先駆けとなり、後に颯爽と走るバイクの商品名「カワサキ・Ninja」のネーミングに影響した。忍者の忍は忍耐の忍、堪忍の忍と言われ、耐え忍びながらも密かに計画を進める生き方を、「忍者の聖地 伊賀」を世界に発信して欲しい。

また黒装束は、歌舞伎などの黒子のように「見えない存在」を表わした物であったが後に、その格好で活動していたと誤認された。現存する「忍者着」は、柿色系統の柿渋色やクレ色で安価に製造でき、元々は甲賀や伊賀地方で使われていた山着、野良着が元である。

忍者の実像は「伊賀衆・甲賀衆」と呼ばれた「地侍」たち。江戸時代以前は「伊賀衆」、それ以降は「伊賀者(いがもの)」と呼ばれ、戦国時代には大きな力を持った大名が現れず、自らの地を自らの力で治める必要から自治が発達し、お互いに連携して地域を守っていた。地侍たちは一国、一郡規模で連合し、支配層が結びついた統治共同体(一揆・ゆい・結)を形成。その自治組織を「伊賀惣国一揆(いがそうこくいっき)」と呼び、結束力が強く仲が良かった。「一味同心」に団結し、「諸事談合・寄合(よりあい)」して、時には多数決で物事を決めた。「みんなで集まり、話し合いで決める」仲良きことが、忍者の里の「掟(おきて)」である。